

心の風景 梅原ひろみ

四月中旬、誘われて韓国の釜山に行き、街を取り巻く山に登った。登山は老若男女問わず人気の娯楽だそうで、よく整備された週末の登山道は賑わっていた。麓の新緑の林を抜けると、まだ葉をつけていない樹々の間に躑躅が鮮やかに咲いている。近寄ってみれば花弁は見慣れぬ柔らかさ、「チヨウセンヤマツツジ」という日本では対馬にだけ見られる種らしい。釜山の山はゴツゴツと岩がちで緑がないと厳めしい印象なのだが、躑躅の紅紫色が遠目にもほわりほわりと滲んでは浮くようで大層美しい。これがこの地の人達の心に根差す風景なのかもしれない、と思った。

ひそかに流された涙の そのなかの／いちばん赤い 深紅の
哀しみ／土のなかに深く深く浸みとおって／四月にふたたび
よみがえったの(略)／すべての山河に満ち溢れるチンダルレ

姜恩喬「つつじ」(チンダルレ) 抜粋
道端にはつつじが数株／花咲いていて、／岩影の下には／
顔のきれいな人がひとり／冷たく寝入っていました。

申東暉「つつじの山河」 抜粋
帰国後、図書館に行くと、躑躅の詩がすぐに見つかった。人の心の奥底にはそれぞれの風景があり、そこには花が咲いているのだらう。詩歌は心の風景まで降りていくための一本の綱なのかもしれない。現代短歌においても、優れた歌集はその性質を内包し

ているようだ。

- ・鬼灯をぼんと挟めば両の掌に不動明王浮き出づるなり
- ・嗚呼あやめ 君を待たむとして僕はちがふ畑に咲いてしまへり
- 小佐野彈『メタリック』
- ・店灯りのやうに色づく枇杷の実の、こども誰かのふるさとである
- ・海に沿ってカーブするとき屋顔の花のいる鮮やかにふるさと
- ・逃げるのがほとんど生きることなりき落ちて形のきれいな椿

山下翔『温泉』

この春、現代歌人協会賞を受賞した『メタリック』と『温泉』より。前者はゲイという属性に基づく歌が注目されがちだが、風景に培われたイメージが支える歌もきつちり含まれている。後者では肉親の縁薄そうな作中主体の抛り所の一つとなっているのが、故郷や過去の記憶の中の、輪郭確かな風景であるように思われる。

- ・はくれんは命のかたちひとりづつ死者の命のしろくふくらむ
- ・枇杷の花香ふゆふぐれ喪ひし人をおもへばにじみゆく白
- ・田んぼには蛙のこゑの充ちてをり蛙とともにわれも啼き継ぐ

本田一弘『あらがね』

同じく今年日本歌人クラブ賞を受賞した『あらがね』では、心の風景は、歌が根差す土壌というより既に歌と一体化し、作品に乗り移ろうとするかのようだ。「言葉とは自らが生まれ育ちし土地や風土に根ざすものにして、短歌とは死せる者と生ける者とが互ひに静かに祈りを重ねていく詩形なり。」と後記に作者は書く。自分はそのような歌を作ることができているだろうか、としばし考えさせられた。

引用：茨木のり子訳編『韓国現代詩選』花神社
金應教『韓国現代詩の魅惑』新幹社